

テス・テラー『飼料小屋』(*The Forage House*) における歴史観の形成

——トーマス・ジェファーソンの DNA と人種問題をめぐって——

塩 田 弘

(受付 2014年10月28日)

序

多様な展開をみせている現代アメリカ詩のなかで、テス・テラー (Tess Taylor) の詩集『飼料小屋』(*The Forage House*, 2013) は、テーマやスタイルにおいて独自の要素を取り込んだ作品として新聞や雑誌などに取り上げられている⁽¹⁾。その注目される第一の点は、テラーの先祖がアメリカの建国の父の一人であるトーマス・ジェファーソン (Thomas Jefferson, 1743-1826) であり、テラーが子孫の立場からジェファーソンの歴史的スキャンダルを受け止めて詩に取り入れていることである。その歴史的スキャンダルとは、ジェファーソンの妻マーサ (Martha Wayles Skelton Jefferson, 1748-1782) が33歳の若さで亡くなった後、彼は所有する奴隷女性、サリー・ヘミングス (Sally Hemings, 1773 (?) - 1835) と長年にわたる関係を続け、六人の隠し子をもうけたのではないかという疑惑である⁽²⁾。このスキャンダルはジェファーソンが大統領に就任中の1802年に当時の新聞に報じられたものだが、本人は認めることはなく、真偽は不明のまま長い年月が経過した。しかし二十世紀後半に DNA 型鑑定によって真偽を確かめる方法が確立し、父親から男児にそのまま遺伝される DNA の Y 染色体をジェファーソン家の男系の子孫とヘミングスの子供たちの男系の子孫とを比較したところ、一致することを証明する論文が1998年に発表された⁽³⁾。これによってヘミングスの子供たちの父親がジェファーソンであると完全に証明されたわけではないが、その可能性が濃厚なものとして大きく報道された。

このような状況をふまえ、正妻の子供の子孫であるテラーは、ジェファーソン家の奴隷の子孫を探し出して交流し、その様子を描いた詩が本詩集のクライマックスの一つとなっている。詩集では、その他にも多くの箇所ではアメリカの歴史を取り上げ、古くは17世紀の植民地時代から現代に到る幅広い時代を扱っている。それぞれの詩において、広範囲にわたる歴史的な事柄について説明を加えることなく用いており、その一つ一つの意味を紐解いていくことも詩を読む際の楽しみの一つとなっている。一方、詩のスタイルは19世紀のアメリカを

代表する詩人ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) の影響を受けながら、そこから独自のスタイルを構築することを目指している。このようなテラーの詩集『飼料小屋』の中で、本稿ではジェファーソンの DNA 型鑑定が示した歴史的事実を巡って浮き彫りになる人種差別のテーマを中心に、詩人が歴史に向かい合う姿勢と、客観的な事実から未来へ向けて友好関係の構築をめざす様子を分析する。

Ⅰ トーマス・ジェファーソンの影

テス・テラーはカリフォルニア州エリサリート市出身で、地元の高校を卒業後、マサチューセッツ州のアマースト大学に進学し、英文学と社会学を専攻して卒業する。その後はジャーナリストとして働きながらニューヨーク大学大学院 (ジャーナリズム専攻) とボストン大学の大学院 (英詩専攻) を修了した後、現在は出身地に戻り、詩人としての活動に併せてウィットティアカレッジとカリフォルニア大学バークレー校のライティングの授業も担当している。

彼女の経歴の中で際立っているのは、テラーが自らの先祖であるジェファーソンについての研究で複数の奨学金を得て、ジェファーソンの歴史的調査を丹念に行っている点である⁽⁴⁾。テラーは自身がジェファーソンの子孫であることは幼い時期に家族から教えられていたが、その事実に関心を抱くようになったのはジェファーソンの DNA 鑑定の報道がアメリカ社会を騒がせた時であった。当時の彼女は20才の大学生で、この時以来、ジェファーソンに大きな関心を持ち続け、長年にわたり歴史的資料を調査すると共に、詩の創作の際には主要なテーマとして繰り返し用いている。

テラーはこれまでに様々な雑誌や新聞に詩を発表してきたが、『飼料小屋』が初めての本格的詩集で、そのタイトルはジェファーソンが所有していた奴隷が住んでいた粗末な家を目指すものと考えられる。詩集では、テラー自身が創作した詩だけではなく、一部には歴史的な文書を詩に取り入れ、負の部分も含めた人間の営みを描いている。アメリカの過去から現在にわたる歴史を様々な手法で取り上げており、その様子は歴史をそのまま切り取りながら物事や出来事を記述する「叙事詩」を新たな詩的想像力でとらえ直したものとみなされる⁽⁵⁾。

このような手法を象徴する一篇が、「世界の果て—ランドルフ・ウィルトン邸宅跡にて」“World’s End: On the Site of Randolph Wilton”である。詩の中ではジェファーソンについては直接言及していないが、いくつもの歴史的な伏線によって、この詩がジェファーソンに焦点を当てていることが分かる。この詩の冒頭は、ヨーロッパからの移民が故郷から遠く離れた「世界の果て」とも思われるアメリカ大陸にやって来た時代から始まり、当時イギリスからアメリカ大陸に渡り植民地の指導者となったジョン・スミス (John Smith, 1580-1631) や、ネ

イティブ・アメリカン(インディアン)の部族ポウハタン(Powhatan)について言及している。詩のタイトルには「ウィルトン邸宅跡にて」と加えられていることから、この詩がヴァージニア州にある旧邸宅ウィルトンハウスに関連があることが分かる。この旧邸宅はプランテーションで財をなしたウィリアム・ランドルフ・ウィルトンの一族によって1753年に造られたもので、ジェファーソンの母親であるジェーン・ランドルフ・ジェファーソン(Jane Randolph Jefferson, 1721-1776)を輩出した一族として知られている。現在、この旧邸宅は1400点の歴史的資料を所蔵する博物館となっており、この詩に言及される歴史的資料はテラーがこの場所を訪れた際に目にした博物館の展示物を指していることがうかがえる。

五部構成になっているこの詩の第一部は、「地図」「Plat」と小見出しがついており、最後の第五部も「地図」「Map」となっており、全体にわたって地図が強調されている。このように地図を強調する理由の一つが、ジェファーソンのルーツを示唆しているとも考えられる。なぜならば、この博物館の中心的展示物の一つは、1755年に印刷された「フライ・シェファーソン地図」「The Fry-Jefferson Map」であり、これは地図作製者であったジェファーソンの父親、ピーター・ジェファーソン(Peter Jefferson, 1708-1757)が手がけたものである⁽⁶⁾。

この詩の一部から三部は旧邸宅所蔵の古地図を基にして、植民地時代から現代に至る時代に言及する。第二部と第三部では、地図上のいたるところに埋葬されている無名の黒人奴隷について言及しており、短い詩の中にアメリカで繰り返されてきた人種差別の歴史が凝縮されている。そして第五部「地図」は、旧邸宅を出て車で家路に向かう詩人の目の前にある実際の風景が描かれる。ここにおいて古地図と現在の地図が示す場所が重なり合い、テラーの目の前に広がる工事中のハイウェイと過去の出来事とが一体のものとしてとらえられる。このような歴史との遭遇を通じて、過去の出来事を生きた存在として身近なものとするのである。

この詩のなかでテラーが歴史と人種差別をテーマとする意図は、わずか二行で構成されるこの詩の第四部にも凝縮されている。

O descendants, I am sorry.

Ancestors, I would undo this if I could. (34)

ああ子孫達よ、私は遺憾に思う。

先祖達よ、もしも私に出来ることならば、これを取り消したい。

引用の一行目にある子孫への遺憾の感情とは、現代も人種問題などで様々な問題を抱えるアメリカが、そのような諸問題を後の時代へと先送りにして、将来に恨みを残すことへの残念な気持ちを表現したものであろう。二行目に「先祖よ、私に出来ることならば、これを取

り消したい」(34)と述べたように、詩集の中で過去の忌まわしい歴史を顧みて、それを解き放つことを呼びかけており、このようなテーラーの意図は詩集全体を貫くテーマとなっている。

高い理想を掲げてアメリカの建国の父とされ尊敬されているジェファーソンは、奴隷制廃止論者として知られ奴隷解放に向けた政策を行う一方で、実際には多くの黒人奴隷を所有するという矛盾を抱えていた。ジェファーソンが黒人奴隷に対してどのように接していたのかは後の時代の歴史家によって解釈が異なり、奴隷解放を目指した理念の人と評価されることもあれば、情け容赦ない奴隷所有者として糾弾されることもある⁽⁷⁾。ジェファーソンとヘミングスとの関係については、二人の間には一定の相互愛が存在したのではないかと考える説もあるが、「搾取で自分本位のもの」(Kukla 141)と否定的に論じるものが多い⁽⁸⁾。一方、ジェファーソンに隠し子がいた可能性を示唆する DNA 型鑑定の結果が出た後も、それを否定する説はいくつも発表されているが、詳細な鑑定の結果、現在では事実として受け入れられる傾向にある。

このように、近年ジェファーソンとヘミングスの関係に関する研究は様々な視点から行われているが、DNA 型鑑定の結果を事実と受け入れ、正面から取り上げているテーラーの作品が「モンティチュロからのジェファーソンへの手紙」“A Letter to Jefferson from Monticello”である。ユネスコの世界文化遺産にも登録され歴史的な観光地となったジェファーソンの邸宅跡「モンティチュロ」にてジェファーソンに宛てて書いた手紙の形でこの詩は書かれている。この中では、四回にわたり“DNA”という言葉を繰り返し用いており、特に詩の第四部は DNA 型鑑定の経緯と意義を示唆した内容となっている。

IV

Families are still stories: Now we look
for them with DNA. DNA would have
fascinated you: It is

Symmetrical, almost rational,
the way you thought America's rivers would be
when you sent Lewis & Clark west

to collect & cross the continent, to gather birds & roots
& pipes & pelts & herbs & a ram's skull that hangs here,
& dialects of tribal languages, which they

subsequently lost.

We haven't found those dialects.

We have found DNA:

& tests of it suggest (though cannot fully prove)

that you had two families:

legitimate & illegitimate,

two rivers proceeding out from you—

remembered unevenly,

like names that have been saved and those

that have been lost.

Your family

made of structured absence.

Some people in your

white family this makes furious.

Others simply wonder what a *family* is.

The word, like *freedom*, shifts

beneath us, recombinant, reforming.

Our country argues now about it.

We can't decide what it should mean. (59-60)

複数の家族があることは秘話であった。今では／それをDNAで調べることが出来る。当時DNAがあったならば、あなたは身がすくむことになっていただろう。／左右対称で、まったく合理的で、／それはアメリカの川が水路になるだろうと／あなたがルイス & クラーク探検隊を西へ送り出して／収集と大陸横断をさたやり方、集めたのは鳥と根菜と／毛皮とハーブと、ここに掛かっている雄牛の頭、／それと部族の言葉の言語体系だが、

それは／後に失われた。／今の私たちは失われた言語体系を見つけることは出来ないが、／私たちは DNA を見つけることが出来る。／（完全に証明するまではいかないまでも）それが示唆することを分析することが出来る。／あなたには二つの家族があり、／ひとつは合法的な家族で、もうひとつは非合法的な家族。／二つの流れがあなたから発生して、／そのうち一方のみが後世に伝えられた。／記録された名前と失われた名前があるように／あなたの家族は／構造的な欠落によって成立している。／あなたの正妻の子孫の中には、ひどく立腹する人もいれば、／ある子孫は「家族」とはいったい何なのかと思いをめぐらす。／「自由」といった用語は、／軽蔑的なものにおとしめられ、DNA 遺伝子が組み変わるように異なる意味に変わる。／私の国は今、このことについて議論している。／私たちはそれが何を意味するべきか決めることは出来ない。／

一行目は、従来は根拠のないゴシップの類いとされていたジェファーソンの隠し子疑惑が DNA の科学的調査によって明らかになる過程を示唆し、その様子を「左右対称で、全く合理的」だとして、DNA とルイス & クラーク探検隊とを比較している。「左右対称」とは、DNA については 2 本の線が平行したらせん状になっている「二重らせん構造」について言及したものである。ルイス & クラーク探検隊とはジェファーソンが派遣し太平洋へ陸路での探検をした最初の探検隊であり、ロッキー山脈の大陸分水嶺を越えてアメリカ大陸の西部と東部の川を調査して作成した詳細な地図をテラーは「左右対称」とみなしている。そして、この両者の科学的な根拠を「合理的」だとして評価するのである。

テラーは詩の中で、DNA 型鑑定で明らかになった事実については徹底的に追求する姿勢を示し、「当時 DNA があったならば、あなたは身がすくむことになっていただろう」と述べた後、最後には民主主義の根幹をなす「自由」が「軽蔑的なものにおとしめられ、DNA 遺伝子が組み変わるように異なる意味に変わる」と述べる。「建国の父の中でも最も民主的な人」(Kazin 149) とも評価されるジェファーソンであるが、テラーは詩の中で再度「自由」を DNA 遺伝子になぞらえ、「DNA 遺伝子が組み変わるように異なる意味に変わる」と述べている。ここで連想されうるものは遺伝子組み換え食品であり、現在、その安全性をめぐって社会に大きな議論が巻き起こっている。テラーは農作物の栽培や有機食品に大きな関心を持っており、新聞や雑誌に環境問題に関する記事の執筆や啓蒙活動を行っており、遺伝子組み換え食品には否定的な意見を持っている⁽⁹⁾。

アメリカでは多くの作物の遺伝子組み換えが行われ、従来の姿の農作物が失われて農業が資本力によって支配されようとしている。このような状況の中、人の健康・生命を維持するための基本として、本来の DNA を有した作物に「自由」に共通する要素を見いだすのである。

さらにこの詩を次のように結んでいることから、ジェファーンソンへの態度が鮮明になっている。

O architect of hopes and lies, brilliant, fascinating—

Ambitious foundering father I revere & hate & see myself in. (65)

ああ、希望と嘘の建物家、見事であり、魅力的で、
意欲的な建国の父を私は畏敬し、嫌悪し、その中に自分自身を見る。

ここでテラーは、モンティチェロの邸宅の設計者である建築家としてのジェファーンソンを、「希望と嘘の建築家」と述べ、輝かしい業績とその影の部分とが同居する様子を対極的な言葉によって表現する。そして「畏敬し、嫌悪し」とあるように、先祖として尊敬の念を抱きながらも、過去の先祖の行いを嫌悪し、アメリカ史の抱える矛盾を自分自身の問題としてとらえ「自分自身を見る」と、身近な問題としてとらえている。このように、単に尊敬や批判の対象としてではなく、ジェファーンソンと自己との一体感を通じて歴史と向かい合うのである。

2 ウォルト・ホイットマンの影

「モンティチェロからのジェファーンソンへの手紙」においてテラーは次のように述べる。

O hypocrite—you make me tired.

Like Whitman, you contradict yourself. (57)

ああ、偽善者よ。あなたは私をうんざりさせる。
ホイットマンのように、あなたは自己矛盾している

この詩でジェファーンソンを「偽善者」と述べる際に、アメリカ最初の「民主主義詩人」と評価されるホイットマンの名前を挙げ、その両者が「自己矛盾している」としている。テラーはホイットマンについて詳細な説明をしていないが、彼女がホイットマンを偽善者とする根拠の一つは、ホイットマンが自らを「自己矛盾している」と述べる『草の葉』(Leave of Grass)の次の引用であろう。

Do I contradict myself?

Very well then I contradict myself,

(I am large, I contain multitudes.) (123)

僕が矛盾しているのかい、
それなら大いに結構、ぼくはたっぷり矛盾してやる、
(だってぼくは大きくて、中身がとっさり詰まっているんだ)

19世紀のアメリカを代表する詩人として、アメリカの詩文化を大きく変えた偉大な詩人とも位置づけられるホイットマンを、テラーが“O hypocrite—you make me tired”と表現した文体は、次のホイットマンの詩を意識したものであろう。

O days of the future I believe in you—I isolate myself for your sake,
O America because you build for mankind I build for you, (362)

おお未来の日々よ、わたしは君らを信じる—君らのためにわたし自身を離隔する、
おおアメリカよ、君が人類のために建設してくれるからわたしも君のために建設に励む、

ホイットマンは文明や人間社会の発展を信じて疑わず、楽天的であり、真にアメリカ的詩人といわれる。ホイットマンは楽観的な人類の未来がアメリカにあると謳っているが、19世紀のアメリカには人種差別が根強く残っており、そういう時代の中で民主主義を肯定的に謳ったホイットマンをテラーは「偽善者」と述べる。加えて、奴隷制に対する矛盾するホイットマンの立場も、彼を偽善者とみなす根拠となるものであろう。ホイットマンは奴隷制度の維持には反対していたが、奴隷制廃止運動家（アボリショニスト）ではなく、アフリカ系アメリカ人が選挙権を持つことにも反対であった（Reynolds 473）。このようにしてテラーはホイットマンの高い文学性を認めながらも、同時に現代の視点から見た公正な評価を試みるのであった。

テラーは詩集全体にわたり、ホイットマンの用いた手法を独自の形で展開する。ホイットマンは物事の羅列を試みた、「カタログ」(catalogue)と呼ばれる文体によって詩を書き、アメリカの様々な要素を列挙し、人々の陽気な歌声が聴こえる詩集を目指した。一方、テラーは歴史の様々な要素を羅列した詩によってアメリカの歴史をたどる。ある詩では歴史的な場所を訪れ、ある詩では地図や文書を見て、ある詩では家族のアルバムを手がかりに歴史に触れて、その体験を基に詩をつくり、歴史を直接手に触れて体感することを目指している。例えば、「陰鬱な風の中のサウスリート」“From Sausalito in a Gray Wind” (24) では、南北戦争についての言及する一方で、核ミサイルの基地に到る戦争の遺構を訪れた体験が詩の題材に用いられる。「メイ・ホワイトコムの手紙」“In May Whitcomb's Letters” (21) は戦地の負傷兵から祖国の家族に送られた手紙をそのまま詩集に収録し、人間を人間として扱わな

い戦争の残酷さを示している。歴史的な出来事から家族の些細な出来事に到る様々な物語が交わる中で、「すべてのものが繋がっている」⁽¹⁰⁾ ことを詩集で示すのである。

3 客観的史実と未来への展望

詩集のクライマックスの一つとなっている「ジェファーソンの庭師ウォームリーの子孫、カレン・ホワイトに会う」“Meeting Karen White, Descendant of Jefferson’s Gardener Wormley”においても、テラーは歴史と人種差別のテーマを繰り返している。ジェファーソンが所有した「黒人奴隷」の一人で庭師であったウォームリー（ウォームリー・ヒューズ、Wormley Hughes, 1782-1858）は、サリー・ヘミングの甥にあたり、本来ならばジェファーソンの親戚にあたる人物である。この詩の中で、「ウォームリーはジェファーソンを埋葬したが、ジェファーソンは彼の家族を売却した」“Wormley buried Jefferson; Jefferson sold his family” (51) とテラーが述べているように、ウォームリーの妻と八人の子供達は、奴隷としてそれぞれ別の所に売却されている。テラーはこのような非情な歴史をたどった家族の子孫であるカレン・ホワイトを探し出して面会する。およそ二世紀にわたる歴史の負の要素を乗り越え、新たな関係を構築する道筋を探り、詩集にその時の様子を説明している。

I explain I am trying to understand my roots. She says she understands: She has spent hours poring through books of records looking for families no one recorded. I tell her I could not understand my family until I understood what was not recorded. (51)

自分自身のルーツを探ろうとしていることを私は説明する。彼女は分かったよと言って、誰も記録していない家族を探して数時間、記録文書を熱心に見た。記録されていないものを理解するまでは自分の家族を理解することは出来なかったと私は彼女に言った。

ここでは先祖の記録をめぐって、「記録されていないものを理解するまでは自分の家族を理解することは出来なかった」と述べる。記録や資料が無い場合、科学的調査や客観的史実に基づく検証が求められるが、ジェファーソンの子孫については、DNAが後世に伝えられ、歴史を紐解く大きな手がかりとなった。こうして歴史に学ぶことで、個人を越えた長い時間の経験を共有・蓄積し、自分自身を理解し、他者との新たな関係を築いていく。テラーとカレン・ホワイトは、このような歴史をめぐる経験を共有したのであった。

結 論

本詩集はジェファーソンの末裔の詩人の、その歴史をめぐる特殊な事例をテーマにした詩集として解釈すべきものではない。人種差別や歴史認識に関して多くの問題を抱えたまま、その解決の手段を見いだすことが出来ずにいる現代社会において、歴史をどのようにとらえるかを、詩作品を通じて探求したものである。そして歴史の暗部をも直視し、そこから未来に向けた良好な関係の構築を目指すのである。ジェファーソンは「全ての人間の平等と自由」を謳った独立宣言の起草者であり、当時としては先進的な思想を持った偉人である。しかし、現代の視点から二世紀前のアメリカの社会状況を考慮すると、そこには時代の制約があった。当時の白人社会の中にあっては、黒人は人間以下の存在であり、奴隷所有者であったジェファーソンについても肯定できない要素が多くある。現代に生きる人間がこれから未来に向けて他者との関係を構築していくときには、過去の反省を踏まえ、歴史を客観的に再評価することが求められる。テラーの詩集『飼料小屋』はそのような歴史に向かい合うために必要なモデルを模索しているといえよう。

注

- (1) 本詩集は、*The New York Times* (2013年10月2日) をはじめ、複数の新聞・雑誌に取り上げられ、好意的に紹介された。
- (2) サリー・ヘミングスは、4分の1だけ黒人の血を引いており、白人に近い容姿であった。正妻マーサの異母姉妹とされるが、ジェファーソン家で奴隷として働き、一生を奴隷の身分のまま過ごした。
- (3) この鑑定は Eugene Foster を中心とした科学者によって行われ、科学雑誌『ネイチャー』(1998年11月号) に発表された。このDNA型鑑定結果を受けて、トーマス・ジェファーソン財団をはじめ複数の人々は鑑定が不正確で信頼できないと主張し、その議論は今でも続いているが、一般には、DNA型鑑定結果はジェファーソンとヘミングスとの間を結びつける信頼あるものとして受け入れられている。
- (4) テラーはジェファーソンについての歴史資料の調査のため、International Center for Jefferson Studies 等の奨学基金を得ており、次のように述べている。“I was lucky in that I got many different grants to work in archives. I made two trips to be in residence at the International Center for Jefferson Studies, which meant that I was basically living across the street from Monticello, Jefferson's home, which is now an enormous museum” (Babineau Online)
 一方で、ヘミングスの子孫も代々自分たちがジェファーソンの子供や子孫であることを語り伝えている。例えば、ヘミングスの次男は1873年に歴史家へのインタビューでジェファーソンとの関係について語っている (Gordon-Reed 25)。近年では、6世代後の子孫にあたる Byron W. Woodson が自らの先祖に焦点を当てて調査を行った本を出版した。
- (5) 詩人の Robert Pinsky は、*The Forge House* の裏表紙に次のような解説を寄せている。“Ezra Pound's definition of the epic—“A poem containing history”—demands courage and intellectual range, as well as lyrical gifts. Tess Taylor meets that challenge in *The Forge House*.”
- (6) 博物館ホームページによると、所蔵する地図は18世紀の Virginia の地図で、地図制作者の Joshua Fry と Peter Jefferson によって制作され、息子のトーマスも愛用した。2011年にはこの地図を中心とした特別展示が行われている。(http://foundinthecollection.blogspot.com/2011/08/fry-jefferson-map.html)

- (7) ジェファークソンについては、近年では Jon Meacham *Thomas Jefferson: The Art of Power* や、Henry Wiencek, *Master of the Mountain: Thomas Jefferson and His Slaves* など、様々な評伝・研究書が近年発表され、その人物像については様々な解釈が存在する。
- (8) ウィーンセックは、ジェファークソンは自分が所有した奴隷に感情など抱いておらず、ヘミングスとの関係は単なる「取引」と解釈する。一方、ゴードン＝リードは、ジェファークソンとヘミングスとの関係は、奴隷とその主人との間の内在的不平等性にもかかわらず、一定の相互愛が存在していたはずだと解釈する。
- (9) “Natural History of My Hunger” 等のテラーの新聞・雑誌記事を参照のこと。
- (10) *New York Times* (2013年10月2日) インタビュー記事を参照のこと。

Works Cited and Consulted

- [Anonymous]. “Walt Whitman, The American Poet of Democracy.” *The Australian Journal: A Weekly Record of Literature, Science and the Arts* 54 (November 1869): 164–67. Print.
- Babineau, Diana. “Tess Taylor’s *The Forage House*.” Web. 10 Nov. 2013. (<http://www.thecommononline.org/features/tess-taylors-forage-house#sthash.TV5P6SXC.dpuf>)
- Gordon-Reed, Annette. *The Hemingses of Monticello: An American Family*. New York: W. W. Norton & Company, 2009. Print.
- Hyland, Jr., William G. *In Defense of Thomas Jefferson: The Sally Hemings Sex Scandal*. New York: Thomas Dunne Books, 2009. Print.
- Kukla, Jon. *Mr. Jefferson’s Women*. New York: Alfred A. Knopf, 2007. Print.
- Meacham, Jon. *Thomas Jefferson: The Art of Power*. New York: Random House, 2013. Print.
- Reynolds, David S. *Walt Whitman’s America: A Cultural Biography*. New York: Vintage Books, 1995. Print.
- Taylor, Tess. *The Forage House*. Pasadena: Red Hen Press, 2013. Print.
- _____. “Natural History of My Hunger” Web. 10 Nov. 2013. (<http://owlsmag.wordpress.com/2010/04/28/natural-history-tess-taylor/>)
- Verongos, Helen T. “A Poet Reckons With Her Inheritance” *New York Times*. Web. 2 Oct. 2013. (http://artsbeat.blogs.nytimes.com/2013/10/02/a-poet-reckons-with-her-inheritance/?_php=true&_type=blogs&_r=1)
- Whitman, Walt. *The Complete Poems*. London; New York: Penguin Education. 1975. Print. (酒本雅之訳『草の葉』岩波書店1998年)

Summary

The Shaping of History in Tess Taylor's *The Forage House*:
Thomas Jefferson's DNA and the Race Problem

Hiroshi Shiota

The purpose of this paper is to explore how we should consider the idea of historical recognition in Tess Taylor's first collection of poems, *The Forage House*. As a descendant of the white branch of Thomas Jefferson's family, Taylor is troubled by evidence of a long-term relationship with Sally Hemings, an enslaved woman who may have had children with Jefferson. As DNA tests conducted in 1998 indicated a high probability that Thomas Jefferson was the father of Sally Hemings's children, she writes, "O hypocrite—you make me tired. /Like Whitman, you contradict yourself." Taylor also meets a descendant of Jefferson's slave and writes a poem about it to develop a future-oriented relationship. Although we are susceptible to a view of history that glorifies the past, Taylor recognizes the need to base historical knowledge on objective facts and a relationship oriented around the future instead of the past. She examines history with modern eyes, as our view of history dictates the answers we have for existing problems. In this regard, Taylor's poems are good models of a forward-looking way to deal with a history we do not want to repeat.